



TITLE:

元初江南における徴税體制について

AUTHOR(S):

植松, 正

CITATION:

植松, 正. 元初江南における徴税體制について. 東洋史研究 1974, 33(1): 27-62

ISSUE DATE:

1974-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153538>

RIGHT:

元初江南における徴税體制について

植 松 正

目 次

は し が き

一 桑哥の登場と理算

二 行大司農司の設置と括勘

三 宋末公田の繼承

む す び

は し が き

モンゴル人によって征服された元代の江南地方は、どのような支配をうけたのであろう。このことに關して、安部健夫氏は、江南に對するモンゴル政權の態度は極めて慎重であつたと言われ、愛宕松男氏は「江南支配の脆弱性」との表現で、元朝が南宋體制のままに推移せねばならなかつた點の多いことを指摘され、かつ地域的にも支配の限界があつたことに論及される^③。一方、元代の農民は殆ど空前の壓迫搾取をうけたとされる有高巖氏の見解もあり、天野元之助氏もこれを引用しておられる^④。ところが現状では、江南支配の性質を論ずべき行政の經緯と社會の實態に關する研究が必ずしも十分とはいえないようである。本稿がもしその空白をいくぶんでもうずめうるならば幸いである。私は前稿において『至元新

格』制定について、財務長官桑哥の失脚と関連させてその行政法としての性格を論じたが、今度は桑哥專權の時期をとりあげたい。表題にいう元初とは、したがって至元二十八年〔1291年〕に至る數年間を直接には指している。何故にこの數年間が注目されねばならないかといえ、至元十三年の軍事的制壓のち、元朝がようやく江南への本格的な支配を企圖してくる時期だと考えるからである。また徴税の對象であるが、鹽課・酒税などはしばらくおき、ここでは土地に對する税を中心に、主として政策史的に考察を進めたい。

一 桑哥の登場と理算

西域の人といわれる桑哥^{サンガ} (Sengge 桑葛、相哥、僧格などとも表記する) がいかなる民族の出身なのか、『元史』卷二〇五・桑哥傳には記されていないが、『新元史』やドーソンの『蒙古史』によると、ウイグル人となっている。彼は諸國の言語に通じ、はじめ臆巴國師の弟子として世祖に接近して西蕃譯史となった。ついで佛教とりわけラマ教關係の役所である總制院の長官となり、その財政的手腕によって實權を握り、ついに宰相の地位にのぼった(至元二十四年閏二月尙書平章政事、同年十一月尙書右丞相に任ず)。彼は舊勢力の據る中書省のほかはに財政府としての尙書省を新設し、行中書省をも行尙書省とし、六部も尙書六部として尙書省に直屬させ、腹心のもの政權をかためようとはかった。桑哥が重用されたのは世祖が利を好んだからとする議論が古來あるが、世祖の性格はともかく、『元史』に姦臣として列せられる阿合馬・盧世榮・桑哥の人脈に注目すべきことはいうまでもない。世祖の時の黨争は、これら一連の側近財政家グループとその反對派との間に展開されたとみられる。その詳細は今述べないが、それら三人に共通する諸點を指摘しておこう。すなわち、その政策の施行の仕方がおおむね強硬であつたこと、登用された一派のものうちにウイグル人など西域系の商人が多かつたと推察されること、彼らの活躍する時期が、日本遠征も含めて對外的に緊張状態にあつたことなどである。盧世榮は桑哥の推薦によって財務長官となつたのであり、そのころにはすでに桑哥は背後に大きな發言力を有していたとみられる。し

たがって、桑哥の江南に對する政策を検討する場合には、盧世榮の時期をも考慮する必要がある。

私はさきに海運事業に携わった朱清・張瑄について論じた際、桑哥の時期の情勢についてふれた。^⑧すなわち、當時元朝は海都の亂による北邊の政治危機と紙幣インフレ傾向による財政危機に直面しており、このために徵稅體制の強化、鈔法改革、海運體制のてこ入れが行なわれた。江南米の北中國への輸送を倍增させたのも桑哥の策であつた。元朝も宋以後の國家の例にもれず、江南の富を國家財政の基盤としていたはずであり、性急な財源の追求が桑哥によつて目ざされた。その強壓的な錢糧徵收は「理算」といわれる。理算とは本來「きちんと計算する」という意味で、必ずしも錢糧の場合にかぎつて用いられるわけではないが、いま問題にするのは、錢糧を鉤考するとか會計するともいわれる會計検査の場合である。^⑨

桑哥以前にも江南で理算は行なわれていた。『元史』世祖紀には次の諸例が見いだされる。

（至元十九年二月庚子）、李羅歡理算未徵糧二十七萬石、詔徵之。

（至元二十一年正月甲子）、罷揚州等處理算官、以其事付行省。

（至元二十二年十月丁卯）、郭佑言、「自平江南、十年之間、凡錢糧事、八經理算、今荅即古阿散等、又復鉤考、宜即罷去。」帝嘉納之。

ここに十年の間に八度まで理算が行なわれたとみえるから、江南征服以後、原則としては毎年未納錢糧の督促が行なわれたのであろう。『元典章』にみえる湖廣行省の「至元十九年錢糧文冊」などもその一環とみなされよう。^⑩この文冊について「體例一ならず」といわれることからうかがわれるように、このころの理算はおそらく江南の全行省を對象としてはおらず、一定の方針のもとに實施されたのでもなからう。元朝の官吏がいれば請負的に、力の及ぶ地方で徵收したというのが實情に近いのではなからうか。だからこそ第三の例のように、荅即古阿散らの鉤考が國家の行政方針としての正當性を失なう結果になったりしたものと考えられる。

桑哥が政權を握ると、理算は非常に厳しく行なわれるようになり、錢穀を徵收するために徵理司という役所が新設された。この役所は至元二十五年九月から桑哥失脚直後の同二十八年二月まで、二年半にわたって存続し、倉庫關係機關に昵みをきかせる會計検査院であつた。尙書省から送りこまれた禿烈羊呵と吳誠が長官（徵理使）に任ぜられ、その徵收督促の厳しさは從來の六部官の比ではなかつた。^⑧『通制條格』卷一四・計點の條に次の記事がある。

至元二十八年五月十七日、奏准、「戸部・工部の勾當多的上頭、去年桑哥等辦集勾當上頭、十二箇舍人委付來。俺商量得、部裏舍人行の體例無有。員外郎之下、教做正七品、司計・司程委付呵、怎生。」麼道奏呵、「恁的勾當有、那般者。」聖旨了也。欽此。

至元二十八年五月十七日、中書省が奏准した。^⑨「戸部・工部の職務が多いといふので、去年桑哥らが職務を遂行するにあたり、十二人の舍人を任命しました。我々がはかるに、六部で舍人が仕事をする例はありません。部員外郎以下に正七品となして、司計官・司程官を任命したらいかがでしょう。」と奏したところ、「汝らの職務であるからそのようにせよ。」と聖旨があつた。これを欽めよ。ここには徵理司とはいつていないが、桑哥が舍人（おそらく蒙古・色目人）を戸部・工部に送りこもうとしたことがわかる。これに對し戸部・工部は部の選任にかかる司計官・司程官に倉庫の検査をさせることを提議し、世祖によってこれが認められた。

理算に對する厳しい姿勢は税糧徵收にも當然及び、江南地方も例外とされなかつた。至元二十五年十月、江淮・江西・福建・四川・甘肅・安西の六省に二人づつ特使を派遣して錢穀を理算させ、しかも護衛のために兵をつけてやつた。^⑩また雲南に行なわれたという記録もある。^⑪至元二十五年には江南各省は行尙書省あるいは特定の人物による節制が許されている。『元史』卷一五・世祖紀によつて左に列舉してみよう。

江淮省管内は並びに忙兀帶の節制するを聽す（正月己丑）

江西管内は並びに行尙書省の節制するを聽す（三月乙巳）

湖廣省管内は並びに平章政事禿滿・要束木の節制するを聽す（五月癸丑）

四川管内は並びに行尙書省の節制するを聽す（五月癸丑）

福建省管内は並びに行尙書省の節制するを聽す（十一月甲午）

行省の權限の強化が理算の前提となるようである。桑哥以前にすでにその原型がある。さきに引用したように至元二十一年十一月、揚州などの地方における理算を行省に委したこと、また至元二十二年九月、江北の諸城の課程・錢糧について杭州行省・鄂州行省に節制させることが提議されたこと^⑧、いずれも理算のために行省の權限を強化することが意圖されている。桑哥の理算は行省を單位として遂行されたところに特色があり、桑哥反對派の人物が行省の權限を抑制すべしと主張するのはこのためである。理算の積極的推進者は桑哥のほかに忻都（江淮行省參知政事のちに尙書左丞）・忙哥臺（江淮行省左丞相）といわれ^⑨、また湖廣では要東木、江淮では沙不丁、福建では減貴里が特に人民に苛酷であつたという^⑩。そのほか協力者として王巨濟・烏馬兒・教化的らがあげられる。手心を加えて理算を忠實に遂行しなかつたために獄につながれる地方官もあつた。江淮行省平章政事の沙不丁は、錢穀の理算が人民の怨みをかけていてこのままでは自分の身も安全でないから、湖廣で理算にあたっている要東木のように三百人の護衛兵をつけてくれるようにと要請した^⑪。何の抵抗もなく平隱に理算が強行されるはずはないのであつた。桑哥の妻の黨人といわれる要東木などは、もともと世祖の信任が厚かつたわけではない。至元二十三年、中書省が彼を平章政事に推薦してきたとき、世祖は次のように言っている^⑫。

要東木小人、事朕方五年、授一理算官足矣。

要東木は人物ではないし、朕につかえてまだ五年にしかならぬ。このものには理算官の一つも授けておけばそれでよい。

かくして要東木は荊湖行省の錢穀を鈎考することとなつた。世祖には要東木を重用する考えがなかつたことが知られると同時に、理算についての世祖皇帝の口吻もうかがわれる。

徵理司が設けられる前年、尙書省は次のような上奏を行なつた^⑬。

前界伴當管著時分、積年官吏百姓拖欠の錢糧多有、侵欺了了的也。俺商量來、百姓拖欠的、這其間裏、且不追徵聽

侯、官吏拖欠侵欺錢物、教追徵呵、怎生。

前任のものら（中書省官）が任じていたときの積年の官吏・人民の滞納の錢糧があり、横領したものもあります。我々がはかりましたところ、人民の滞納分は、このところは追徴せずに猶豫し、官吏の滞納・横領の錢物は追徴せしめたいかがでしよう。

世祖によつてこれが認められるや、尙書省は各行省に理算實施の指令を發した。江西行省に送った咨文にいう。

前省（中書省）の各界に、中統元年より今に至るまで、多く未納虧欠の錢糧等の物あり、すでに照勘し另に聞奏を行なふのほか、尙書省を立つるより始めとなし、まさに辦納すべき差發・課程・稅糧等の錢物は、若し新しきに従つて官に委して提調せざれば、切かに恐るらくは前きに依りて拖欠し、深く未だ便ならずとなす。

なお、宣慰司官、轉運司官、路などの長官・首領官に委してとりしめることとした。^④對象となる錢物は、中統元年以來の「あらゆるまさに納むべき差發、稅糧、金・銀・鐵冶・茶鹽・鷹隼・皮貨の諸色の課程及び造作・和買の諸物」ときわめて包括的である。期限通りに指定の倉庫に赴いて完納させ、收・支・見在の錢糧數目を毎月記録して詳細に行省に報告させ、行省から季ごとにそれを整理のうえ、尙書省に報告させる。「但し、短少あるいは拖欠して錢糧を納めざる人あらば、枷項くわかせしもの號令し、條に依りて追斷せよ」というように、實施の段になると、尙書省官が世祖の前で上奏したきれいごととは相當に様子が變つてきている。

追徴の起算は中統元年（1260年）以來となつており、ほぼ三十年分に近い未徵分がとりたてられようとした。江南においては征服以後十年餘りの分であらう。このような長期間に累積した未徵錢糧を一舉に期限付きで支拂わせようとしても、それは不可能事といわねばならない。ところで未徵錢糧について『圭齋文集』卷九にのせる趙孟頫の神道碑によれば、天下の錢糧を理算したところ、已徵分數百萬に對し、未徵分は數千萬、つまり已徵分に十倍する未徵分が残つており、理算とは名ばかりで、實は無原則的に收奪するだけだといふ。^⑤この未徵分の免除案が世祖の前で通過しそうになるや、桑哥は腕をふりあげて絶對反對を唱えた。これに對し趙孟頫はやおら進みでてこう言つた。

今理算錢糧、其不可徵者、皆死亡之數、不及今放散免之、他日有言中（尙）書省累失陷錢糧數千萬者、丞相何以自

解。

いま錢糧を理算してその徴收できないものはすべて死亡したものの分でありますから、ここで免除してやらなければ、いつの日か尙書省が錢糧數千萬の穴をあけたというものがでてきましよう。そうなたら丞相はどう辯解なさるおつもりか。

かくして免除は決定したが、注目すべきは未徴分は死亡したものの分だといっていることであり、このうめあわせが下級の官廳を督促に奔走させ、人民を苦しめたようである。『元史』卷一九一・良吏傳中の許楫傳の記事は、理算官の態度の一端をうかがうに足るものであろう。

(至元)二十三年、授中議大夫徽州總管。桑哥立尙書、會計天下錢糧、參知政事忻都・戸部尙書王巨濟、倚勢刻剝、遣吏徵徽州民鈔。多輸二千定、巨濟怒其少、欲更益千定。楫詣巨濟曰、「公欲百姓死耶ノ生耶ノ如欲其死、雖萬定可徵也。」巨濟怒解、徽州賴以免。

徽州路總管の許楫が二千定を餘分に納めたところ、惡名高い王巨濟はさらに千定を追加して納めさせようとした。これには許楫も抵抗し、王巨濟に「あなたは一體、人民が死ぬのを望むのか、生きるのを望むのか、もし死ぬのを望みなら、たとえ一萬定だろうと徴收できますよ。」といてひらきなおし、おかげで徽州路だけは追徴を免れたという。當年の分だけを納めるのではなく、累積した未徴分として餘分に納めるのでなくては、理算の實を示したことになるからである。

理算官の厳しい會計検査は、結局は一般人民のうえに波及してこざるをえない。「所在の圍圍皆滿つ」といわれるほどで、揚州・杭州ではことに慘狀を呈し、五百人が命を失ったという。程文海の至元二十六年の上奏に次のようにいう。

今尙書省惟以鈎考錢穀、剝害生民、爲務、所委任者、率皆貪饕微利之徒。四方盜賊竊發、良以此也。

錢穀の厳しい徴收が盜賊の蜂起のきっかけになったことを示している。こういう狀況は、桑哥に反對する政治家や文章家によっていくぶんの誇張が付されていると考えられないこともない。しかし『元史』世祖紀によれば、桑哥專權の時期に

は次第に江南の反亂が増加していることからしても、全くの誇張と片付けるわけにもいかない。

趙孟頫、阿魯渾薩理、程文海、さらに徹底、兵鉉ら、桑哥に抵抗して世祖に直言する人物がやがて多くなり、さしものウイグル人の財政家桑哥も孤立し、世祖は彼を誅殺しなければならなかった。次に示す桑哥の言葉は、桑哥に敵對する岳鉉の側に立つ史料にみえるものではあるが、桑哥が彼なりに信念と成算をもって理算を推進したことがうかがわれる。世祖の面前で岳鉉と争い、桑哥はこう訴えている。

天下之大、既已屬之臣矣。方理財助國、今建官徵誅方就緒、而岳某乃敢啓赦以沮臣。

廣大な天下は私におまかせいただいております。だからこそ財政をおさめて國家を助けようとしているのです。いま新たに官を建てて徴誅がまさに緒につこうとしているやさきに、岳とやらが大赦などと言いだして私を邪魔しようとしています。

結局、理算とはどういうものであったのか。桑哥の時期には、特派された色目人がとりしきったり（節制）、尙書省に直結する行尙書省官がとりしきったりする形態で、各行省を單位として帳簿上の累積した未徴分を清算しようとしたものであった。いわば請負いの形態で理算が個人的手腕にゆだねられるから、時に無原則になるのも無理からぬところであった。

二 行大司農司の設置と括勘

桑哥はただ帳簿上の未徴分を收斂しようと、暴政を行なったにすぎないのだろうか。強硬政策を遂行するにはそれなりの準備があったのである。元代の江南には兩税法が行なわれた。この期における夏稅徵收の實施には疑問があるが、ここでは稅糧（秋糧）徵收の基礎となる括勘をとりあげよう。至元二十四年の括勘は、宋代の經界法に系譜をひき、江南における元代最初の田土調査である。括勘以後の調査としては延祐二年（1351）の經理がある。藤野彪氏の研究によれば、括勘は行大司農司によって行なわれた。行大司農司は大司農司の出先機關として至元二十四年から同二十七年まで平江路に設け

られ、そのもとに勸農營田司をおき、勸農と豪右の隠藏の田祖を尋究することが目的であった。『大元官制雜記』行大司農司の條によれば、官田については人を召して開耕させて租を科し、民田については業主を督責して期限をつけて開耕させ、規定の税額を經理したとあるから、やはり括勸を指導監督する立場にあったものと考えられる。ところで藤野氏はこれらの官衙は「土地兼井の弊害を除く」ことを目的として設置され、經理を行なつて盡力したが、「兼井の激流の前にはいたし方もなかった。隠藏の田租を究むるも、多くを望めなかったので遂に行大司農司、勸農營田司は廢止された」と結論された。たしかに桑哥の時期には江南に積極政策がとられた。しかしそれは兼井をつきくずそうとするものであったろうか。藤野氏も引用しておられるように、『元典章』一九には、「影占係官田土」「漏報自己田土」「田多詭名避差」の三條の條畫がみられ、行大司農司の機能をうかがうことができる。いま問題とするのは、官田を影占する場合である。

至元二十六年二月、勸農營田司承奉行大司農司參照議擬到奉條畫内一款、亡宋各項係官田土、每歲各有額定籽粒、折收物色。歸附以來、多被權豪勢要之家、影占以爲己業佃種、或賣與他人作主。立限一百日、若限内自行赴行大司農司並勸農營田司出首、與免本罪、其地還官、止令出首人種佃、依例納租。據在前應收籽粒、並行免徵。

これについて藤野氏は「期限内に申告した者には罪を免じ、ただ奪った土地を官に沒收し、現在に至るまで横領した租税を徵收しなかった」と解説される。原文に「其地還官」とあるのは、たしかに土地を政府に返還させることである。だが大土地所有者はその土地について權利を全く喪失したといえるだろうか。「出首した人に種佃させ、規定通りに租を納入させる」ということは、影占の行爲そのものは不當不法とされたのであるが、大土地所有者にとっては、官田としての登録をして、官田の小作料としての官租を納入すれば、それでよかったのではなからうか。元朝政府が官田耕作における重層構造を法制的にも認めているのではないかと思われる。『元史』卷一五・世祖紀・至元二十五年正月癸丑の條に次のようにみえる。

江淮行省言、「兩淮土曠民寡、兼井之家、皆不輸税。又管内七十餘城、止屯田兩所。宜增置淮東西兩道勸農營田司、

督使耕之。」制曰可。

ここにみられるように、政府にとっては何よりも税糧確保に主眼があり、兼井が問題とされたのは兼井の家が租税を納めようとしなかったからである。さきの「官田を影占する場合」「不正申告の場合」「詭名の場合」の三條には、行大司農司の議による罰則が定められていた。^③行大司農司がこの條畫施行に現實的即應的な姿勢をもっていたことを示すだろう。注目されるのは、違反した土地の廣狹の程度によって罰則に差のあることで、官田を影占するものが最も重く、不正申告がこれに次ぎ、詭名はさらに軽い。官田税糧の増收に重きをおく當局の態度を反映するものであろう。

宋元交替の混亂に乗じて、勢力家が土地を兼井していったことは確かであろう。ここで江南占領以來の對兼井政策を一瞥し、上述の行大司農司の役割を明確にしたい。至元十七年には、「江南の逃亡の民の田を擅據する者は罪あり」との敕が公布されている。^④進駐してきた軍人や勢力家を對象とするものであろうが、實際的な効果が發揮されたとは思えない。またよく引用される至元二十年十月、同二十二年二月の減租の詔書も、江南の大地主を牽制するというよりは、むしろ小農民保護の政治的ポーズとみなされよう。^⑤桑哥の息のかかった盧世榮の時になって、ようやく江南について土地への支配が企圖される。それは何よりも國家の政策を反映しやすい官田にあらわれてくる。『元史』卷一三・世祖紀・至元二十一年十二月甲辰の條に次のようにいう。

中書省臣言、「江南官田、爲權豪寺觀欺隱者多。宜免其積年收入、限以日期、聽人首實。踰限爲人所告者、徵以其半給告者。」從之。

勢力家や寺觀などがとりこんでいる宋代に官田であった田土については、當事者の自首申告によって、あらためて官田として登録させ、それまでの未納の租税は徴收を免除する。もし期限内に申告せず他人に告訴されるようなときには田土を沒收し、その半分は注進したものに給してやる。文面にはあらわれていないが、申告の後は租税をきちんと納入させ、承佃者の佃戸からの收租權を認めてやるというものであろう。兼井に對するこういう姿勢は、次の淮西廬州における荒田開

耕の場合にもうかがわれる。『元典章』一九・荒田類には、この問題について年次のことなる二條があつて、兩者を比較すればその間の経過をみるができる。江南征服直後の至元十四年、モンゴル軍の侵入にあつて逃亡したものの田土について、人を募つて耕作させることとした。この際もとの田主が所有權を主張できるのは半年のうちと定められた。^⑧この政府の措置は、それから七年餘りを経て、勢力家の田土擴大に寄與する結果となつてあらわれた。ところが政府としてはもとの田主の主張を無視することもできなかったとみえて、至元二十二年には他の荒田において毎丁百畝を與え、それに足らない時にかぎつて、富豪が冒占している田土からさいて與えることとした。勢力家の兼并に對する承認と大幅な讓歩とみなされよう。^⑨至元二十三年七月には營田總管府が設けられ、官田について登録と開耕獎勵にあたつた。この役所が兼并狀況に對處したところからみても、藤野氏が推定されたように、實質的には行大司農司の前身であらう。

江南占領以來の兼并狀況への對處の姿勢から類推されるように、行大司農司が行なつたのはあくまで「田租を尋究することであつて、勢力家を彈壓して田土をとりあげようとするのではなかつた。むしろ勢力家の手をかりて、政府の財源を確保するに近い。國家は進行している兼并狀況に介入して、勢力家の利益の一部をすいあげようとする。少なくとも官田に關しては、確實にしかも大幅にすいあげようとする。勢力家は介入を許さざるをえないにせよ、それによつて國家の庇護をうけることもなり、小作人からの收租權を保證されたのである。行大司農司が設けられたために、かえつて豪民の横暴がまかりとおる場合もでてきた。『江蘇金石志』卷二〇「鎮江路儒學復田記」に次のようにいう。

至元二十四年、行大司農司開司、又被丘永崇等、乘勢作係官邊江漲沙田地、起納官租奪占。

ここに行大司農司の設置と豪民の丘永崇が學田を奪占したことが關連して述べられている。しかも奪占は官租を納入することが契機となつておこつたのである。

行大司農司の職務の勸農とは何であらうか。『元史』卷一五・世祖紀・至元二十五年正月癸丑の條に次のようにいう。

詔行大司農司・各道勸農營田司、巡行勸課、舉察勤惰、歲具府州縣勸農官實迹、以爲殿最。路經歷官・縣尹以下、並

聽裁決。或怙勢作威、侵官害農者、從提刑按察司究治。

行大司農司また勸農營田司は地方の役人を督責し、その勸課の實績により勤務成績と評定する。^①至元二十四年に、大司農司の發議により、路府州縣の達魯花赤が勸農の職を兼ねることになったことと關連しよう。^②『元典章』二三「革罷下鄉勸農」の條には、江南の勸農の路官による現地視察を廢止するに至った経緯が記されている。^③視察は人民の負擔になるばかりというのであろう。この一條は桑哥失脚後の至元二十八年の末の日付であるから、行大司農司が設置されていたころには、勸農の路官が勸課のために鄉村をたびたび視察したのだらう。勸課とはつまるところ、租税を滯納せずに納めさせることにかたむかざるをえない。^④次の「流民嘆」の詩もまた桑哥時代の農民の苦しみを、作者の王渾の口を介して傳えるものであろう。^⑤その一節にいう。

朝家勸課儘憂勞

おかみは勸課で夜も日も明けぬ

只爲有名多少實

うわべつくりい 實ともなわぬ

常平糶爲前省壞

常平 前省がぶちこわし

義廩近年無廣積

義倉 このごろ貯えなし

江南最苦過都錢

過都錢おもき江南に

更着營司日搔屑

こたびは營司に無體をさせる

營司已罷民力蘇

營司罷むとて ひと息つけば

大府兼農到徒設

お役所つくるはむだなこと

前省とは尙書省、營司は勸農營田司を指す。「大府兼農」の大府とは、憲府すなわち御史臺系の役所を指し、至元二十七年三月、行大司農司・勸農營田司が廢止されたのちに、勸農業務が提刑按察司に、ついで肅政廉訪司に吸収されたことをいうのであろう。

さて勸農に關して想い起こされるのが、つとに有名な元代の鄉村組織、社制である。社の設置目的の一つに勸農があり、農業技術指導、水利保全をはじめ、農民を農業に精勵させることが社長の任務とされていた。至元二十八年頒行の『至元新格』の治民の一條に次のようにいう。^④

諸社長、本爲勸農而設、近年以來、多以差科干擾、大失元立社長之意。今後凡催差辦集、自有里正・主首、其社長、使專勸課、……

ここにいう「近年以來」とは、桑哥專權の時期にちがいない。差科について社長が關與して人民をさわがすことが多かったという。『至元新格』でわざわざ「社長はもと勸農のために設けたものだ」と強調しなければならなかったのは、勸農衙門の行大司農司・勸農營田司と社制とがかなり密接なつながりをもち、ために鄉村において社長が何らかの責任を負わされることがありがちだったのではなからうか。『元典章』の「社長」の用例の中に、ただ一例にすぎないが、社長が納税に責任をもたされている事例があり、しかもこれは至元二十四年のものである。（『元典章』新集戸部・官員職田依鄉原例分收の條、本論文四〇頁に引用）これからは本來の里正・主首の體制でいこうというのが、『至元新格』の趣旨と考えられる。^⑤

江南における社の編成の過程は明確にしがたいが、桑哥專權の時期の社制はことに注目されてよいのではなからうか。

括勘の實施方法については具體的な史料に乏しいが、やはり行省の指令によって、路を單位として税糧額を報告させたものようであり、^⑥上記の勸農衙門はこれを完遂させるよう強力な指導監督を行なったのであろう。いま松江府の場合について『正徳松江府志』によって検討したい。しばしば引用される同志卷六「江浙行省所委檢校官王良議免增科田糧案」によると、松江府の税糧額の變遷は第1表のごとくである。宋末賈似道の公田政策以來、括勘、朱清・張瑄の田土の籍沒、經理を通じて、松江府の税糧額は増加してきた。この状態はそのまま明代に及び、明初洪武年間には百二十萬石にも達し、財政的に重要な大官田地帯を形成する一方、この地方の農民への過重な租税負擔が社會問題となる。いま注目したいのは、税糧額が一府の責任として示されていることである。括勘あるいは經理といって、田土の面積とその所有關係

第1表 松江府税糧表

南宋紹熙年間 (1190~94)		112,301石
景定3年 (1263)	※	
宋末		422,800石
元至元24年 (1287)	括勘	458,903石
大徳7年 (1303)	※※	
延祐元年 (1314)		653,900石
延祐2年 (1315)	經理	745,000石

※ 賈似道が公田を派買して、158,200餘石を増糧

※※ 朱清張瑄の田土を斷沒、10餘萬石にあたる

を明確にするのも、結局は府とか路の責任において負擔すべき税糧額、すなわち額管税糧を決定することに意味がある。行省が路府に責任をもたせ、路府は州縣に責任を分擔させる。宋代の官田が元代に繼承されたとするならば、廣大な官田を有する松江府などの額管税糧はことに多かったに相違ない。至元二十四年の括勘を経た松江府の税糧額四十五萬八千九百三十石とは、南宋末の税糧額四十二萬二千八百餘石を踏襲し、それにやや上のせしたものとみられる。當然、この額を實際に徴收するにはかなりの困難があった。『正徳松江府志』卷六「松江府助役田糧記」には次のようにみえている。

然歸附之後、亡宋科徵文冊、散失殆盡、至元二十四年、催納税糧、止憑鄉司草冊數目、以致里正・主首陪閉有科無徵等項錢糧、上戸漸至困乏。況中下戶計哉。

宋代の徵税臺帳が紛失してしまったので、至元二十四年の括勘にひきつづく徵税に際しては、郷司のもとにあった帳簿の數によらざるをえず、そのため里正・主首が徵收不能分の錢糧を肩がわりして納入（陪閉）しなければならなかった。里正や主首には原則として財産の多いものが充當されるが、この代納のために、比較的富裕なはずの彼ら上戸層が窮乏化してしまったという。縣あるいは府當局の厳しい督促がこの事態をひきおこしたものである。同じ至元二十四年の江西行省袁州路の場合をみてみよう。

江西袁州路萬載縣人氏、於至元二十四年、蒙上司將民間所佃職田、分撥各官衙、每一畝、勒要送納上等白米六斗、……使民不獲已而變賣家產了納、……以致所佃職田民戶、多有逃亡。及親鄰・主首・社長人等、官司勒要閉納、以致下民流散、拋下田土、無人耕種。（『元典章』新集戶部「官員職田依鄉原例分收」の條）

この例は職田に關するものであるが、至元二十四年の措置以來、職田の佃戸は耐えかねて逃亡するものが多く、そのため當局は逃戸の親鄰・主首・社長らに強制的に代納させている。いまひとつの例は、年代ははっきりしないが、鎮江路の公田の場合である。

佃戸逃移、田土荒白、租額虧欠、有科無徵、年終不能成就、里正被其箠撻、出售田園、准折牛具、回易糧米、代替送輸。役戸有破蕩之慘、府縣有揭閉之憂。(『至順鎮江志』卷六・常賦)

里正などの役戸が代納させられて没落の憂き目にあっているというのは、さきの松江府の場合と同様である。さて、この「府縣有揭閉之憂」とは何であろうか。『通制條格』卷一四「揭借閉納」の條に、「平江等路の官吏、糧を欠かざる人戸の處において、逼勒して逃亡・事故の米糧を揭借閉納せしむ」というように、揭閉とは揭借閉納をつづめた語である。役戸が代納しきれない場合には、このように政府の下級官廳が責任額をうめあわせねばならず、地方官の悩みのたねでもあった。因みにこれと同様の態様は宋代にもみられる。『宋會要輯稿』食貨一・農田雜錄に、淮南・江東・浙西地方の官田について次のようにいう。

(乾道八年) 七月七日、臣僚言、淮南・江東・浙西沿江沙田蘆場、所立新租、大爲民害。向來臣僚起請、止爲有力之家、侵耕冒佃。今却將應千人戸租產已業、一概打量、所立新租、數倍舊日、往往盡地利所得、不足輸官、逃移紛紛、禍及鄰保、甚則州縣爲之陪納。

括勘の内實についていまだ少し検討してみたい。『道園學古錄』卷四二の陳思濟の神道碑には、彼の池州路における括田の記事がある。

時又有括田之命、公令有田互相根括、增田三千頃以應命、而反覆苛橫之苦、視他而少息矣。

ただしこの記事は、彼が鎮北湖南道肅政廉訪使から池州路總管に轉じたときのことであるから、桑哥專權の時期に屬するものではない。しかしここから至元二十四年における括勘の狀況をある程度は類推できると考える。括田の命令が下る

と、陳思濟は田土の所有者たちに互いに調査をさせた。そして彼らの協議、自首申告にもとづいて三千頃分の田土を登録して、この田土からあがる税糧を新たに政府に納入させることとし、命令に應じた。おかげで、他の地方にみられたような一度納入したものを再度催促されたり、すじちがいの税糧をむりに納入させられたりといった苦しみはずっと少なかったという。ここに注目すべきは、まず括勘は増田を期待していたということ、それに田土所有者たちの協議によって命令に應じたために民間の苦が少なかったということであろう。

第一の點は、さきに述べた松江府における税糧の増加からも確認されよう。また第二回目の大規模な田土調査である延祐二年の經理において、これと同様の記録を見いだすことができる。藤野氏も引用しておられる『滋溪文稿』卷二二の吳元珪の行狀にいう。^⑨

今中書臣經理江淮田土、第以增多爲能、加以有司頭會箕斂、俾元元之民困苦日甚。

經理にあたつては、增多すなわち増田・増糧が役人の腕のみせどころとされ、頭わりに税が課せられることもあった。これはどういふことかといへば、同文集卷九の齊履謙の神道碑に次のようにいう。

初括江南地時、民或無地輸税、或地少輸多、曰虛加糧、江西尤甚。

土地を所有しないものにも税がかかり、所有する土地の面積が少なくても、餘分に税がかかる。こういうものが虚加糧（虚糧）といわれ、この弊害が江西にはとくに甚しかった。當時の社會や制度からすれば、増糧しなくてもすませられるのではなく、必ず増糧がしかるべきものとして要求されたにちがいない。陳思濟が行なつた括田は、この史料のニュアンスから推測すれば、かえつて例外に屬する。一方的強制的に増田・増糧が決定されるのがむしろ普通で、これが農民への負擔として轉嫁されるから問題なのである。

そこで第二の點、すなわち陳思濟が民間の協議にゆだねたことであるが、ここの文章は、彼がいわゆる良吏であつたというプラスの評価をとまなうものであることはいうまでもない。とするなら、彼はやはり例外に屬するのであつて、これ

も一般にはそうはいかなかったというのが實情であろう。有高巖氏、藤野彪氏が指摘されたように、經理がきつかけとなつて反亂が起つたという史料は數多い。括勘の場合に直接反亂を生じさせるきっかけになつたとの史料は見いだしてないが、さきに理算に關連して一言したように、たしかに江南の反亂は増加している。不當な田土調査、不當な徵税に對する人民の抵抗が豫想されればこそ、陳思濟は慎重にも民間の協議にゆだねたのであろう。

以上にみたように、括勘は田土調査とはいひながら、鄉村における本格的な丈量を意味したかというところを疑問になつてくる。おそらくこれは帳簿上の問題なのである。すなわち、路なら路でどれだけの税糧が納入可能と豫定されるか、その路の役人はどれだけの税糧を請負うかの問題であつた。路府州縣はその責任を里正などの當役の戸に分散する。だから里正が代納しなければならなかつたし、それでも間にあわなければ、路府州縣がうめあわせしなければならなかつた。括勘は、さきの理算政策の姿勢にも似て、必ずしも現實の農村の状態に則して行なわれたとはいひ難い面がある。

三 宋末公田の繼承

しかしながら、いくら増田増糧といつても、無制限というわけにはいかない。何らかの目途がなければならぬ。桑哥の時期に江南の官田の耕種が問題になつた。至元二十五年正月、人民を招募し、免役・免稅の優遇措置をとつて江南の曠土及び公田を耕作させた^⑤。これに關連する記事が『元典章』一九「開種公田」の條である。これによると、公田荒閑の田地を富戶の百姓に與え、また工本を與えて百姓（一般人民）に耕作させることが、脱脫によつて提議された。この議をうけた尙書省は、富戶には工本を與えないことを確認のうえ、公田耕作獎勵の措置をとつた。ここにいう公田とは『元史』『元典章』の通常用例である職田の意でなく、官田一般を指すのではなからうか。宋代の官田の再開發が意圖されていると考えられる。さきに引用した行大司農司が審議した條畫において、影占している官田を返還させたのも、宋代から繼承すべき官田の

第2表 嘉興路・松江府税糧額

『至元嘉禾志』		『正徳松江府志』大徳中	
額管糧	351,941石	額管糧	199,755石
額管米	351,742		
歳減公田二分米	45,922	歳減公田二分糧	26,761
		聽候糧	3,321
		事故糧	15,654
實徵糧	306,019	實徵糧	154,016
實徵米	305,819		
公田全租米額	229,610	公田全税糧額	133,801

「額定の籽粒」をとりたてるためにほかならない。

いま官田税糧がどれほどの比重を占めるものか、『至元嘉禾志』によって嘉興路（管下に松江府・嘉興縣・海鹽縣・崇徳縣がある）の、『正徳松江府志』によって松江府（管下に上海縣・華亭縣がある）の統計を第2表としてかかげる。なお周藤吉之氏が『至元嘉禾志』を用いて算出されたように、公田の全租米額・全税糧額をあわせて示しておく。周藤氏はここから宋末賈似道が創設した公田の規模について論證された。ところで至元・大徳年間の税糧減免の記事を『至順鎮江志』巻六・寬賦によって檢出すると次のものがある。

（至元）十五年、量減公田歲課二分。

節文、浙西所有公田、可權依舊例、召佃客耕種、合得歲課、十分中、量減二分、
（大徳）九年二月、均免官田租税二分。

節文、大徳九年、江淮以南諸處、佃種官田租税、均免二分、……

『正徳松江府志』の歳減の記事が、『至順鎮江志』にみえる大徳九年のものとすると、『松江府志』の大徳中の公田とは官田一般を指すのではなからうか。

大徳年間、松江府において減免の對象が宋末公田にのみ限定される必然性はないと考えられる。ともあれ、ここでは官田税糧の比重の高さを比率として示すにとどめよう。嘉興路における公田租米は空・三〇、松江府における官田（公田）税糧は空・〇%までを占める。

次に宋末賈似道が浙西地方に創設した公田が、元の時代にどのように繼承されたかについて検討しよう。すでに松江府における税糧増加からもある程度想像できるところではあるが、ここでは鎮江路の場合について具體的に檢證してみた

第3表 鎮江税糧表(粳米)

	『嘉定志』	『咸淳志』	『至順鎮江志』
※ 一府合計	109,066石 (100.0%)	226,949石(100.0%) { 92,290石(100.0%) 公田租米 134,659石	146,251石(100.0%) { 有司所管 122,489石(100.0%) 江淮財賦府所管 23,430石 江浙財賦府所管 332石
錄事司			8石(0.0%) 有司所管 8石(0.0%)
丹徒縣	30,797石 (28.2%)	45,290石(20.0%) { 24,373石(26.4%) 公田租米 20,917石	25,218石(17.3%) { 有司所管 23,953石(19.6%) 江淮財賦府所管 1,265石
丹陽縣	44,022石 (40.4%)	80,859石(35.6%) { 39,654石(43.0%) 公田租米 41,205石	55,883石(38.2%) { 有司所管 46,672石(38.1%) 江淮財賦府所管 9,211石
金壇縣	34,247石 (31.4%)	100,800石(44.4%) { 28,263石(30.6%) 公田租米 72,537石	65,142石(44.5%) { 有司所管 51,856石(42.3%) 江淮財賦府所管 12,954石 江浙財賦府所管 332石

※ 『至順鎮江志』では、一路合計額を示す

い。『至順鎮江志』卷五・卷六には、一路および所屬の錄事司と三縣別の田土面積や税糧額に關して各種の統計が残されている。田土面積は延祐二年の經理にもとづき、税糧額は至順二年〔333年〕の數である。また宋代の地方志の統計もここに引用されており、いま問題にする公田については、『咸淳鎮江志』から轉載の統計との比較ができて好都合である。

第3表は秋糧のうち、その大部分を占める粳米についての統計である。

〔江淮財賦府について〕元代の江南ことに浙西地方には、田土税糧を管理するのに、大別して有司、江淮財賦府、江浙財賦府の三系統がある。江浙財賦府は至大元年〔308年〕に設けられ、朱清・張瑄の沒官田土を管理する。江淮財賦府は『元史』卷八九・百官志によると、宋の謝太后・福王の獻するところの事産、および賈似道の地土、劉堅らの田を管理するといふ。その設置年代に關する記事は

不十分であつて、『安雅堂集』卷九「江淮等處財賦都總管府題名記」などによつて補なわなければならない部分が多い。この役所は江南占領後まもなく至元十六年〔1279年〕に、江浙等處財賦總管府として設けられ、桑哥專權の至元二十六年〔1289年〕に江淮等處財賦總管府と改稱され、中宮の管下におかれた。そのうち大徳四年〔1303年〕に廢止されて、その田賦は有司所管となつた。至大元年に江淮等處財賦都總管府として新たに發足し、その後一時期廢止されたかもしれないが、天曆二年〔1308年〕（『元史』百官志、『正徳松江府志』卷六の王良の議案による）あるいは翌至順元年〔1309年〕（『安雅堂集』による）には、「復び立つ」と設置が確認されている。なお『安雅堂集』によれば、その管理するのは、宋の水衝少府の所有のもの、宗室の私するところのもの、大臣の嘗て籍して入るものという。

『至順鎮江志』によれば、宋代嘉定年間〔1208-24年〕には、鎮江府各縣の稅糧負擔比率は、丹陽縣が四・四%、金壇縣が三・四%、丹徒縣が六・二%の順であつた。ところが賈似道の公田政策によつてこの順位が變つてきた。三縣合計の公田租米額は十三萬餘石であり、これは從來の一般稅糧額九萬餘石をしのぐから、當然公田のあり方によつて大きく變つてはありうる。咸淳の時の公田を除いた從來の稅糧負擔比率は、丹陽縣三・〇%、金壇縣三・六%、丹徒縣六・四%であり、嘉定年間と比較して大差なしといえる。ところが公田租米を各縣にくみいれて計算してみると、金壇縣が首位となつて四・四%、以下丹陽縣三・六%、丹徒縣三・〇%の割合に變る。金壇縣においては七萬餘石の公田租米が徴收されたが、これは鎮江府における公田租米の半ばを越えるものであり、いかに公田が金壇縣に多く創設されたかを示す。

これが元代に入るとどうなるであろう。管轄の三區分を合計したものの縣別比率をみると、金壇縣四・五%、丹陽縣六・二%、丹徒縣七・三%となる。まずは宋末の公田を含めた稅糧の縣別比率に近いといえる。ついで有司所管分についてみれば、金壇縣三・三%、丹陽縣六・一%、丹徒縣六・六%となり、兩財賦府所管分を省いたためにいくらか變動があるにせよ、これまた宋末の縣別比率に近似したものと判斷される。このことは何を意味するのか。元代における縣別稅糧負擔額の源流が宋末にあることはほとんど明らかであろう。元代になつて稅糧額そのものは宋末よりかなり減少してはいる。しかし、公田の設置が元代にも影響を残しているとするならば、こう考えざるをえない。結局、賈似道が創設した公田の

税額は、元代には有司所管分に繼承されていると考えられる。^③

次に面積を問題にしよう。『至順鎮江志』巻五の田土統計には、所管別、官民別のほかに成熟荒閑の別、納糧免糧の別などがある。納糧有司所管田と、そのうち税糧をあまり期待できない荒閑を除いた成熟の官民田の面積についてみると、第4表のようである。納糧有司所管田面積の縣別比率（丹徒縣元・六％、丹陽縣元・一％、金壇縣元・三・三％）に近似したものであり、納糧有司所管田面積と納糧有司

第4表 鎮江路田土面積表（Ⅰ）

	納糧有司所管田
一路合計	15,341頃52畝(100.0%) {成熟官 3,632頃55畝(100.0%) " 民 11,206頃80畝
丹徒縣	3,050頃07畝(19.9%) {成熟官 720頃14畝(19.8%) " 民 2,311頃67畝
丹陽縣	5,174頃96畝(33.7%) {成熟官 1,164頃53畝(32.0%) " 民 3,891頃86畝
金壇縣	7,116頃49畝(46.4%) {成熟官 1,747頃88畝(48.2%) " 民 5,003頃27畝

第5表 鎮江路田土面積表（Ⅱ）

	有司所管田	宋末公田 (左欄に比しての割合)
丹徒縣	5,085頃36畝 {官 821頃65畝 民 4,263頃71畝 官田率 16.2%	257頃60畝(31.4%)
丹陽縣	8,218頃50畝 {官 1,312頃13畝 民 6,906頃37畝 官田率 16.0%	593頃74畝(45.3%)
金壇縣	8,410頃28畝 {官 2,161頃01畝 民 6,906頃38畝 官田率 25.7%	830頃94畝(38.5%)
		公田合計 1,682頃28畝

所管成熟官田面積の縣別比率もほぼ平行する。したがって宋末公田創設の影響をうけている税糧額は、それぞれ各縣の有司所管田土の——おそらくは成熟官田の——うらづけをもっていることが推測される。次に『至順鎮江志』卷五に載せられている宋末に買いあげられた公田面積を、元代の有司所管田面積に對比してみよう（第5表）。はたして公田が元代に繼承されたとするならば、公田は有司所管の官田の部分に繼承されたと考えるのが妥當であろう。各縣の官田面積に對する宋末公田面積の割合は、丹徒縣では三・四%、丹陽縣では五・三%、金壇縣では三・五%であり、宋末公田の比重がそれぞれ相當高いことが納得されよう。また官民田の比率は、丹徒・丹陽兩縣では官田二に對し民田八を示すが、金壇縣の官田率は五・七%と高い。鎮江府に創設された公田約一六八〇頃のうち半分は金壇縣に所屬し、金壇縣の官田率が高いのもここに起因する。なお兩財賦府所管の田土も官田であるが、鎮江路においてはその税糧額・田土面積ともにさほど大きくないので、いまはこれにふれないでおく。

元代に繼承された公田の態様については、森正夫氏の研究がある。氏は『至順鎮江志』卷六にみえる皇慶二年〔333年〕の文書によつて、官田のみを耕作する貧難佃戸の存在形態として論述しておられる。重複するところもあるが、私は政治過程との關連において公田がどのように繼承されたかについて考えてみよう。この文書は、監察御史が「鎮江路の公田はその租額が甚だ重い」と問題をほりおこしたことに端を發している。監察御史は鎮江路管下の三縣に「照勘して回申せよ」と指令したが、この文書の大部分はそれに答えた金壇縣の申文である。金壇縣といへば、官田率が高く、しかも宋末公田が多く創設されたところであつた。金壇縣はその地の長老たちを集めて諮問し、それにもとづいて宋末公田の重租が現在に至るまで農民を苦しめていることを強調し、減税を要請している。宋が滅亡に瀕している徳祐元年〔275年〕、謝太后は公田を罷めるとの詔を發した。ここに賈似道の公田は制度上終りをつげた。モンゴル軍が都にせまる直前のことであるから、民間の支持を得ることをねらつたのであろう。當然、浙西の人民はこの措置を歓迎した。至元十二年〔1325年〕の誤りか、元朝の支配下に入ったとき、公田は宋代の制にならつて税を徵收しないことになった。これもやはり元朝の占領政策の一

環として、新附の江南の人民の支持をとりつけようとしたのであろう。やがて建言するものがあって、至元十五年〔1278世〕にはさきに示したような減租の詔書が公布され、浙西の公田は權りに佃客を召して耕種させ、歲課は二〇%を減免することとした。元朝政府は宋末に公田であった田土について無税のまま放置しておかなかった。金壇縣の言い分によれば、至元十五年の詔書で「權りに」と言っておきながら、爾來三十六年間、何ら正式の措置がされたこともなく、しかも宋代には免除になっていた水脚米がその後正税の二五%分徴收されて、定額にくみこまれたものでは（收科入額）、二〇%どころか五%しか減免になっていないではないかというのである。さらに行大司農司・勸農營田司が實荒の公田を強制的に耕作させ（逼令人戸開耕）、荒閑のところを成熟として税糧を課したり、職田に充當したりした。ついで「近年、また賈似道の公田を分揀し、財賦提舉司に隸して另管す。これにより公田は一向に重困す」という記事がある。ここにいう財賦提舉司とは江淮財賦府のことであろう。とすれば、この役所の改廢年代から推して、近年とは至大元年にちがいない。また「賈似道の公田」とは何であらうか。さきに一言したように、江淮財賦府所管田土には「賈似道の地土」が含まれており、これが『安雅堂集』にいう「大臣の嘗て籍して入るるもの」に相當しよう。となればこれは沒官田であらう。賈似道が政策として行なった公田とはいえないのではないか。もしも宋末公田そのものであるなら、有司所管分に入っているはずである。統計的にも宋末公田の面積は、丹陽・金壇兩縣については江淮財賦府所管田土面積を超えるから、ここにいる公田とは少なくとも宋末公田のすべてではありえない。賈似道が公田創設の際に供出した田土が含まれるかもしれないが、ここは官田というのに同じなのではないか。松江府の場合に、王艮が議案中に朱清・張瑄の沒官田土について「官田の私租糧額も亦た重し」というのと同様のことを表現しているものと考えられる。そうなると行大司農司が強制耕作させた公田の方も疑問がでてこようが、しかし行大司農司が官田一般について措置したとしても、こと金壇縣においては事實上宋末の公田がその對象として大きな部分を占めたことは疑いをいれまい。

金壇縣は當縣の公田の實情を訴えて次のようにいう。

且以金壇一縣公田言之、亡宋元賣戶、止二百餘家、抱佃輸納、歸附以來、各家消乏逃亡、累及官府。大德辛丑・乙巳、兩蒙本路并憲司、體知其害、申奉省劄、委官挨問撒佃、計一萬五千餘戶、皆係農田細民、本自貧窶。

宋代の公田では、二百餘戸が高額公田の租米をとりまとめて納めていたが、元代に入つて彼らは没落してしまつた。これでは路なり縣なりが租米を代納しなければならぬので、大德五年・九年の兩次にわたつて、とりしらべのうゑ、撒佃とて一萬五千餘戸にわりあてて小作させた。彼らは皆貧乏な小農民であつた。さらに貧窮の實情を訴える部分がつづく。

又作公田、初非見其有利、情願請佃開耕、官司因租糧無所歸著、挨究得此人或見種其田、或元種其田、或曾受其田、或典賣其田、勾追到官、置局監禁、日夜拷打、逼勒承認。納五斗之上、及至秋成、催租勾擾、赴倉送納。又有船腳・加耗・倉用、得米一石上下、方可輸納正米五斗。

しかも公田を耕作するようになったというのも、農民が耕作の利をめぐめてに願ひでて請佃耕作したのではなく、強權によつて耕作納税を義務づけられたからである。役所では税糧負擔のもつていざどころがないために強壓的手段にうつつたえた。その土地に何らかの關係を有するもの、例えば現に耕作していると、あるいは以前耕作していたとか、あるいは以前寄託をうけて納税したことがあるとか、あるいはその土地を質入したとか、そういうものたちをつきとめて、拘引して監禁し、日夜拷問を加えて、むりやりに一畝當り五斗以上を納めることを認めさせた。とりいれの時期になると、官吏が税を納めろとうるさく督促してまわる。おまけに一畝當り五斗納めても、納めたことにはならない。船脚・加耗・倉用などの附加税米があつて、これを含めると一畝當り一石ばかり、これでやつと正米五斗を納めたことになるのであつた。さてこの一段はいつのことをいふのであろうか。元朝の支配下に入つた直後とすると、さきの寛やかな措置と相ひ反することになる。農民に對するとりしらべと關連させればさきの大德五年・九年とすることも否定できないが、私は耕作納税が強制されたところから、それに先行する行大司農司・勸農營田司の強硬な措置を指していると考えたい。鎮江路においてたしかに括勘といわれて延祐の經理冊のような統計が作成されたとの史料はないが、宋末公田の元代への繼承に

行大司農司の果たした役割は大きかったのではないだろうか。藤野氏が引用された『正徳姑蘇志』卷四一の「高仁傳」によれば、「延祐の經理の際に、丹陽・金壇兩縣の公田の虚額七千（石）を除いた」という。鎮江路の虚額は、至元・大徳の間に税糧負擔を強制せられたことに起因すると考えられる。したがって前掲の『至順鎮江志』の諸統計の數字は虚額七千を除いたのちのものである。さらに考えるならば、經理前夜の皇慶二年の文書を本志に収録していること自體が、經理を評價する立場にたつものであらう。

また『吳正傳文集』卷一九の「郷校堂試策問」に次のようにいう。

富者蓋仍宋公田之舊、輸納之重、民所不堪。議者非不知其害、以爲歲久額定、欲減無由言之、未必聽也。

公田の重租が繼承されたことの不都合を人は知らないわけではない。それなのにどうしようもないのはなぜか。何年も経ってしまった今となつては額が定まつてしまい、減じようにも言っていきようがない。そんなことは聴きとどけられるはずもないからだ。その状況にどう對處したらよいかと問うのが試験問題である。このような悲觀すべき状況におちいったというのも、固定した徵税體制が確立しているからである。その徵税體制は何かというに、「額定まり」とみえるように額管税糧の仕組みである。これこそ兩税法における定額徵收制にほかならない。括勘が、あるいは定額徵收制が南中國に廣範に實施されたとは考えにくい。しかしその後元末まで南中國からの海運による糧食補給が、國家體制を維持する上に重要な意義をもっていたことを考えると、元朝が宋代の兩税法を繼承したことについて積極的な意味を見いだしたい。兩税法下における均税の理念は全人民の公平な税負擔を意味せず、その實績主義のために負擔の重い地方はなかなか税が軽減されない。元朝が江南の一部地域に重税を課するのに成功したことについては、兩税法の寄與するところは大きかったといわねばならない。初期元朝政府は賈似道の創設した公田を最大限に利用して國家の財政基盤の確立をはかったといえるだろう。國家はまず取りやすいところから取らうとする。それには、かつて一度は搾取體制の存在した土地から取るのが近道である。松江府や鎮江路の公田耕作者は、宋元の王朝交替によって最終的に何らの恩恵もこうむらなかつた。

『正徳松江府志』に「加ふるに亡宋公田の重額の租を以てす」(卷六・王良の議案)とか「重ぬるに宋季公田の虚數を以てす」(卷三三・宣績上・劉輝傳)などというのは、宋末の公田法が決して途絶するものでなかったことを示している。さらに推測されるところ、宋末に公田ではなくして一般の官田であったものも、元代になって公田なみの重租を割り當てられるというような事態もありえたのではなからうか。もしそうならば、公田と官田とを峻別する必要もなく、公田イコール官田としてその言葉が混用されるのも無理もないことになる。宋末公田はいわば政府にとって最も搾取しやすい土地であった。創設されて間もなかったから、勢力家の浸透がある程度排除することが可能であった。しかしこの状態が固定的に續いたとは私には考えにくい。いかなる官田にも代納の機會を利用して土地の權利をねらう勢力家が介入する可能性はあったと考えたいからである。さきの『吳正傳文集』の「富者」とはそのような中間層の存在を示唆する。政府にとっては、農民が貧困で税糧を徴収できないのでは困る。したがって勢力家などの中間搾取者の存在も一概に否定せず、これと妥協してゆかねばならないことも多い。『元典章』『通制條格』の中に桑哥の時期に、官吏や坊里正・主首などの勢力家が税糧を鈔などで一括して納入してしまふ、いわゆる結攬(後世の包攬)が横行したとの記事がみられる。他の時期に結攬がなかったとはいえないが、至元二十八年の『至元新格』や科税條畫に、結攬・攬納の禁止の規定がみられるところからすると、さきに括弧についてみたような桑哥の時期における政府と勢力家の結びつきをうらがきするようである。

む す び

本稿はさしあたり、ウイグル人の財務長官桑哥專權の時期を中心とする江南に對しての政策史を意圖したものである。彼は江南に對して大規模で強力な徴税體制をしようとした。行中書省を行尚書省に改めて根據とする尚書省に直結し、この行省の權限を強化して腹心のものを特派し、行省を單位として理算を行なった。理算の監督のために新たに徵理司を設立した。江南占領以來の未徴錢糧を徴收しようというわけであるから、もともと無理なところがあったが、徴税請負人た

る理算官の厳しい會計検査のために、江南では被害者が續出して相當の混亂もおこり、南方の反亂も頻々と生じて政情は安定しなかった。理算の對象のひとつである税糧を徴收するためには、新設の行大司農司・勸農營田司が大きな役割を演じた。この役所は括勘の實施を監督するために設けられたが、その方針として税糧の確保に主眼があり、そのためには勢力家の兼井狀況に介入してこれを利用したと考えられる。勸農といつても單なる農業奨励ではありえず、勸課すなわち税糧を滞納させないことに目的がある。そこで勸農と密接な社制と關連させて、桑哥の時期には社長が大きな働きをしたのではないかと考えた。括勘とは結局、各路府がひきうける額管税糧を決定することに意味があり、その際地方官には増田すなわち増糧することが要求され、ここから虚糧も生じた。この期においては本格的な田土の丈量は行なわれなかったとみられる。路府は州縣に、州縣は里正・主首あるいは社長にその責任を分散する。だから納むべき税糧が不足したときには、役戸に責任が問われ、ひいては路府州縣が責任をとつてうめあわせ（掲閉）しなければならなかった。括勘はこのシステムをつくつたという意味で重要である。ついで額管税糧の根幹をなす官田の問題に論及した。宋末に賈似道が創設した公田は元代に繼承された。鎮江路について検討した結果、宋末公田の税糧額は元代には有司所管の額管税糧の中に繼承されていることが明らかになった。公田の土地そのものも元代には、行大司農司などの詮議を通じて官田として編成されたが、官田税糧徴收のシステムをも元朝は繼承したことに注意しなければならない。この定額徴收制は結局、兩税法體系の中にあるものにほかならず、元朝が江南において兩税法を繼承して實施したことに積極的な意味を見いだそうとした。

桑哥はあらゆる階層からの抵抗にあい、失脚して誅殺された。かなり亂暴で強壓的な方法によってではあるが、江南から財源を確保して元朝の國家的支配を確實にしたのは、まさに彼の力であつた。しかも桑哥失脚後の體制によって、桑哥の遺産はひきつがれたのである。ここではやや強壓的な側面は影をひそめ、いくらかの中國知識人には活躍の場が與えられた。そのひとつのあらわれが、至元二十八年元代最初の法典『至元新格』の制定であらう。

はじめにふれた江南支配の強弱についてここで一義的に論斷することは困難である。江南全體として支配が浸透したか

といえどもいえない。兩廣・福建などの地方には正官がおかれていないところもあり（『至元新格』選格の一條）、こういう地方は元朝政府としては反亂が起きなければ、あるいは少なければそれでよいところであったかと思われ、これはたしかに支配の弱い側面である。かといって、桑哥の時期には揚子江下流域に對する積極政策もあり、その結果農民が重税に苦しめられるようになるのは、支配の強い側面としてやはりみのがすことはできない。元朝の中國への支配體制を究明するうえで、みずぐすことのできないのが勢力家の存在である。桑哥は勢力家をコントロールすることによって國家體制の確立をめざした。國家の頂點と小農民の中間に、下級の政府機關や土着勢力の中間層を設定する巧妙な支配體制であつた。一見モンゴル人・ウイグル人と中國人との葛藤として元朝に特有とみえる相が、案外、宋以後の國家的支配の特質を解明するヒントとなるかもしれない。この意味で徵稅機構の中で果たす勢力家の役割——陪閉、結攬など——が注目されねばならないだろう。

註

- ① 安部健夫「元時代の包銀制の考究」（『東方學報』京都第二四冊・一九五四年・所收）、『元代史の研究』一九七二年・所收）
- ② 愛宕松男「元の中國支配と漢民族社會」（『岩波講座世界歴史』九・一九七〇年・所收）
- ③ 有高巖「元代の農民生活について」（『桑原博士還曆記念東洋史論叢』一九三五年・所收）、天野元之助「元代の農業とその社會構造」（『人文研究』第一三卷第七號・一九六二年・所收）
- ④ 拙稿「竄輯『至元新格』並びに解説」（『東洋史研究』第三〇卷第四號・一九七二年・所收）
- ⑤ 『新元史』卷二二三・桑哥傳、ドーソン『蒙古史』（岩波文庫版・下巻・一九三八年）第三編第三章。
- ⑥ 桑哥の略傳については、野上俊靜「桑哥と楊埴眞伽——元代宗教史の一面——」（『大谷大學研究年報』一一・一九五九年・所收）参照。
- ⑦ 例えば、趙翼『廿二史劄記』卷三〇「元世祖嗜利顯武」

⑧ 拙稿「元代江南の豪民朱清・張瑄について——その誅殺と財産官沒をめぐる——」(『東洋史研究』第二七卷第三號・一九六八年・所收)

⑨ 理算(會計検査)をふくめて世祖時代の財政については、駕淵一氏が「蒙古の統一」(『東洋文化史大系』宋元時代・一九三八年・所收)においてふれておられる。

⑩ 『元典章』二「考計收支錢物」の條にいう。

至元二十二年、湖廣等處行省契勘、……今准中書省咨、照勘到本省所轄去處、搬造到至元十九年錢糧文冊、體例不一、請依腹裏、一體照勘、通行造冊咨來。

⑪ 『元史』卷一五・世祖紀・至元二十五年九月癸卯の條にいう。

尙書省臣言、「自立尙書省、凡倉庫諸司、無不鉤考。宜置徵理司、秩正三品、專治合追財穀、以甘肅等處行尙書省參政禿烈羊阿・簽省吳誠、並爲徵理使。」從之。

また『元史』卷二〇五・桑哥傳にいう。

自立尙書省、凡倉庫諸司、無不鉤考。先摘委六部官、復以爲不專、乃置徵理司、以治財穀之當追者。時桑哥以理算爲事、毫分縷析。入倉庫者、無不破產、及當更代人、皆棄家而避之。

⑫ 引用の文章の前に、「延祐二年十月、中書省照得」とあるから、奏准の主體は中書省とみられる。

⑬ 『元史』卷一五・世祖紀・至元二十五年十月庚申の條にいう。

從桑哥請、以省・院・臺官十二人、理算江淮・江西・福

建・四川・甘肅・安西六省錢穀、給兵使以爲衛。また『元史』卷二〇五・桑哥傳にいう。

十月、桑哥奏、「湖廣行省錢穀、已責平章要東木、自首償矣。外省欺盜必多。乞以參政忻都・戸部尙書王巨濟・參議尙書省事阿散・山東(東)西道提刑按察使何榮祖・札魯忽赤禿忽魯・泉府司卿李佑・奉御吉丁・監察御史戎益・倉樞密院事崔瑛・尙書省斷事官燕眞・刑部尙書安祐・監察御史伯顔等十二人、理算江淮・江西・福建・四川・甘肅・安西六省。每省各二人、特給印章與之。省部官既去、事不可廢、擬選人爲代、聽食元俸。理算之間、宜給兵以備使令、且以爲衛。」世祖皆從之。

十二人の理算官の名はすべて明らかに。理算官と任地の順序が對應しているとすれば、その關係は左のようになる。

江淮行省	忻都・王巨濟
江西行省	阿散・何榮祖
福建行省	禿忽魯・李佑
四川行省	吉丁・戎益
甘肅行省	崔瑛・燕眞
安西行省	安祐・伯顔

忻都是江淮行省參知政事に任じており、王巨濟は江淮行省で理算にあたっていた(『元史』卷一五・世祖紀・至元二十六年四月甲戌の條)。崔瑛は甘肅行省右丞に任じていた(『元史』卷一七三・崔瑛傳)。江淮・江西・福建・甘肅・安西の各行省において、色目人と中國人がペアになっているのが注目される。

⑭ 『元史』卷一五・世祖紀・至元二十六年六月辛巳の條にい

う。

詔、遣尙書省斷事官秃烈羊阿、理算雲南。

秃烈羊阿は初代徵理使に任ぜられた人物にほかならない。

⑮『元史』卷一三・世祖紀・至元二十二年九月乙亥の條にい
う。

中書省以江北諸城課程・錢糧、聽杭・鄂二行省節制、道途
迂遠、請改隸中書。從之。

⑯「知非堂外稿」(『知非堂集』所收)卷四の程文海の行狀にい
う。

臣竊以爲、清尙書之政、損行省之權、罷言利之官、行恤民
之典、於國爲便。

⑰『道園學古錄』卷四二の陳思濟の神道碑にいう。

桑哥用事、奏請通行理算錢糧、實以無義肆虐、民空其家
財、往往妻子寒餓困辱、有不忍言者。中(尙)書右(左)
丞忻都・浙省丞相忙哥臺、奉行尤力。

⑱『元史』卷一七三・葉李傳にいう。

立行司農司・木綿提舉司、增鹽酒醋稅課、官民皆受其禍、
尤可痛者、要束木禍湖廣、沙不丁禍江淮、滅貴里禍福建。
又大鈎考錢糧、民怨而盜發、天怒而地震、水災沴至。

⑲『元史』卷一六三・烏古孫澤傳にいう。

(至元)二十六年、丞相桑哥建議考校錢穀、天下騷動。澤
嘆曰、「民不堪命矣。」卽自上計行省。要束木怒曰、「郡國
錢糧、無不增羨、永州何爲獨不然。此直孫府判、倚其才辭
慢我。亟拘繫之、非死不釋也。」明年、桑哥敗、要束木伏
誅、澤始得釋。

また『元史』卷一六八・陳天祥傳にいう。

(至元二十三年)六月、命理算湖北湖南行省錢糧。天祥至
鄂州、卽上疏劾平章岳東木兇暴不法。時桑哥竊國柄、與岳
東木姻黨、爲其爪牙羽翼、誣天祥以罪、欲致之死、繫獄幾
四百日。二十五年春正月、遇赦得釋。

⑳『元史』卷一五・世祖紀・至元二十六年九月丙申の條にい
う。

江淮省平章沙不丁言、「提調錢穀、積怨於衆、乞如要束木
例、撥戍兵三百人爲衛。」從之。

㉑『元史』卷一四・世祖紀・至元二十三年四月己未の條にい
う。

遣要束木勾考荆湖行省錢穀。中書掾要束木平章政事、脫脫
忽參知政事。有旨、「要束木小人、事朕方五年、授一理算
官足矣。脫脫忽人奴之奴、令史宣使才也。讀卿等所進擬、
令人恥之。其以朕意諭安童。」

㉒『元典章』二「百姓拖欠錢糧聽候」の條。上奏の日付は、
至元二十四年五月十二日である。

㉓『元典章』新集吏部「長官首領官提調錢糧違作」の條。尙書
省からの咨を准けたのち、江西行省は各路に指令を發した。

袁州路が江西行省の割付を奉じたのは、至元二十四年六月であ
る。本條が前掲の『元典章』の一條と關連すると判斷したのは
内容の關連とともに、日付の近接が參考になるからである。

㉔桑哥の時期に路の總管が提調錢糧官といわれている例が『元
典章』四七「路官借使官物」の條にみえる。按察司僉事に不正
を摘發されたのは、臨江路提調錢糧官總管の姚文龍である。

㉔ この報告ははじめ相當に細かい數字まで要求されていたようである。『通制條格』卷一四「錢糧去零」の條にいう。

至元二十五年九月、尙書省江西行省咨、追理排年拖欠糧斛、及每歲打算各路所申、俱有積算勾勺抄撮零數、委是素煩。今及打算收支糧斛、若至伍勺以上、收作壹合、伍勺以下、削去、似爲省便。

㉕ 『圭齋文集』卷九の趙孟頫の神道碑にいう。

時桑哥遣忻都・王濟等、理算天下錢糧、已徵數百萬、未徵猶數千萬、名曰理算、其實暴斂無藝、州縣置獄株連、故家破產十九。逃亡入山、吏發兵蒐捕、因相挺（挺）拒命、兩河間盜有衆數萬。

さきの註㉔の『道園學古錄』に「實以無義肆虐厲」とあるのも同様の意である。さらに『紫山大全集』卷一五の揚珠台の神道碑にいう。

（至元）二十七年、姦臣橫暴、分遣惡黨、禍毒天下、以追徵逋欠爲名、所至凶殘百至、雖唐漢酷吏之不爲者、盡其毒螫、死者相望。所在有司、股慄屏息、而不敢言、亦反有助惡爲姦、以肥其家者。

㉖ 『元史』卷一三〇・阿魯渾薩理傳にいう。

桑哥奏立徵理司、理天下逋欠。使者相望於道、所在囹圄皆滿、道路側目、無敢言者。

㉗ 『元史』卷一七三・崔瑊傳にいう。

銜命江南、理算積欠逋賦、期限嚴急、胥卒追逮、半於道路。民至嫁妻賣女、殃及親隣。維揚・錢唐（塘）、受害最慘、無故而殞其生、五百餘人。

これとはほ本文の記事が『元史』卷一七・世祖紀・至元二十九年二月庚辰の條にもある。この地方での理算の苛酷なことは次の『牧菴集』卷二四の孫頤の神道碑の記事からもうかがえる。

以僧格爲丞相、爲尙書省、中書六曹、悉以歸之、而鉤考尤酷、省臣而下或杖辱、而閭中獨輕平、未嘗若浙省迫人于死者。

㉘ 「知非堂外稿」（『知非堂集』所收）卷四の程文海の行狀。同様の趣旨の史料は多いが、『圭齋文集』卷九の趙孟頫の神道碑にいう。

（阿魯渾）撒里曰、今災異數見、盜賊蜂起、皆桑哥聚斂所致。

㉙ 『元史』本紀に江南の反亂を記録するのにその史料源の均一性が前提とされねばならないが、ある程度の傾向をうかがうに足ると考える。『元史』本紀に記録された江南の反亂の件数は、

至元二十三・二十四兩年には各一件、二十五・二十六兩年には各八件、二十七年には十二件、桑哥失脚の二十八年には一件である。これらの中には廣範圍に行動した董賢舉や鍾明亮の反亂が含まれる。至元二十六年には浙東、二十七年になると太平州など揚子江に近い地域の反亂も記録されている。

㊱ 『僞吳集』卷一二の岳鉉の行狀。

㊲ 藤野彪「元の行大司農司について——世祖朝の經理——」

（『愛媛大學歴史學紀要』第一輯・一九五三年・所收）

藤野氏は本論文で行大司農司が創設されたのは至元二十三年であることを論じられたが、その後の論文「元朝の經理」（『愛媛大學歴史學紀要』第五輯・一九五七年・所收）において、至

元二十四年に訂正された。なお藤野氏が言われたように、行大司農司はその後復活され、至元三十年から元貞元年まで揚州路に設置された。ところで『至順鎮江志』卷一三・公廩・治所に次の記事があるが、鎮江路の行大司農司は揚州路のそれとどのような関係にあるのか、いまのところ成案をもたない。

行大司農司、至元二十四年置、以今府治爲之。元貞元年省。

③ 藤野氏はこの三條の内容をもつて括助そのものとされたようであるが、私はこの點にいささか躊躇を感じる。ここから括助の具體的方法をよみとることは可能であろう。しかし三條は、至元二十六年に勸農營田司が行大司農司からの指令をうけたものであり、これらは直接には括助實施後の措置を指すのではなく、これらは括助のとらえ方の相違とも關連するので付言しておく。

④ 「隱占係官田土」「漏報自己田土」「田多詭名避差」の三條の罰則が『元典章』一九の卷頭に表として載せられていることは、至元二十六年の規定が桑哥失脚後も前例として生きつづけていることをうかがする。

⑤ 『元史』卷一一・世祖紀・至元十七年十二月丙申の條。
『元典章』三・聖政卷二「復租稅」の項にいう。

至元二十年 月 日、欽奉聖旨節該、江淮百姓生受、至元二十年合徵租稅、以十分爲率、減免二分。
同じく「減私租」の項にいう。

至元二十年十月、欽奉詔書内一款節該、至元二十年合該租稅、十分中、減免二分。所減米糧、仰地主、却於佃戶處、

依數除豁、無得收粟。

至元二十二年二月、欽奉詔書内一款、江南有地土之家、召募佃客、所取租課、重於公稅數倍、以致貧民缺食者甚衆。今擬將田主所取佃客租課、以十分爲率、減免二分。

周藤吉之「清代前期に於ける佃戸の田租減免政策」(『經濟史研究』第三〇卷第四號・一九四三年・所收)、『清代東アジア史研究』一九七二年・所收)、森正夫「明清時代の土地制度」(『岩波講座世界歴史』一二・一九七一年・所收)參照。周藤氏は元代の私租減免策を列擧して、「但し此等の政策が實際上いかなる程度にまで施行されたかは、疑問の存する所である。」と言われる。森氏には、「私租の削減令が元朝によって出されているのは、實效はともかく、それ自體、江南の直接生産者農民の間における佃戸の比重の高さを反映しているが、……」との言及がある。

⑥ 『元典章』一九「荒閑田土無主的做屯田」の條にいう。

至元十四年三月、欽奉聖旨、……據淮西道宣慰司昂吉兒奏、「淮西廬州地面、爲咱每軍馬多年征進、百姓每撒下的空閑田地多有。若自願種田的人教種呵、嚙便當。教種時分、與了限次、教他田地主人來者。主人每限次裏不來、願種田的人每、教種者。種了之後、主人每來、道是俺的田地來、麼道、休爭占者。……」麼道爲這般奏的上頭、與聖旨去也。聖旨到日、田地的主人、限半年、出來經由官司、若委實是他田地無爭差呵、吩咐主人、教依舊種者。若限次裏頭不來呵、不揀甚麼人、自願種的、教種者。更軍民根底、斟酌與牛且農器種子、教做屯田者。種了之後頭、主人出

來、道是俺の田地來、麼道、休爭要者。欽此。

③⑧

『元典章』一九「荒田開耕三年收稅」の條にいう。

至元二十二年九月十一日、(中書省)奏、「淮西福州・廬州那裏有主底田地裏、有氣力富豪人家占著底也有。別個百姓每來種阿、無主底田地裏與、不勾阿、富豪之家多占來的田地與了、他每根底、二三年的稅不要阿、怎生。」奏阿、……都省除已剉付戶部、欽依聖旨事意、多出文榜、召募諸人開耕。若有前來開耕人戶、先於荒閑地土內、驗本人實有人丁、約量標撥、每丁不過百畝。於是不敷、於富豪冒占地土內、依上標撥。據開耕人戶、三年外、依例收稅外、咨請依上施行。

この一條は、『元史』卷一三・世祖紀・至元二十二年九月乙亥の條に、「聽民自實兩淮荒地、免稅三年。」とあるものと符合しよう。細かいことであるが、乙亥は六日にあたるから、その字形からみて『元典章』の十一日は六日の誤りかと思われる。

③⑨ 『元史』卷一四・世祖紀・至元二十三年七月己巳の條にいう。

用中書省臣言、以江南隸官之田、多爲強豪所據、立營田總管府。其所據田、仍履畝計之。

また『元典章』一九「荒田開耕限滿納米」の條にいう。

至元二十三年十一月、湖廣行省准中書省咨。爲設立營田都總管府事內一件、江南係官公園沙蕩管屯諸色田糧、諸路俱有荒蕪田土、並合招募農民、開墾耕種。若不少示寬恩、難以招集。合無將荒蕪田土、蠲免一切雜泛差役、似望不致荒蕪、官民兩便。

④⑩ 藤野彪「元朝の經理」(註②)

④⑪ このような體制はやく北中國において實施されていた。大司農司の設置と管下の巡行勸農司の設立がこれである。『秋潤先生大全文集』卷三七「絳州正平縣新開溥潤渠記」にいう。

至元改號之六載、詔立大司農司、……外建行司、曰使而副、歲時巡視、責郡縣長吏、條綱甚悉、考其成績、而明殿最。

④⑫

『元典章』一一「兼勸農事署銜」の條にいう。

至元二十三年八月二十八日、中書省奏准各路達魯花赤總管提調農事。欽此。……又據大司農司呈、各路府州縣、已除見任未滿官員、將農事一體署入階銜。具呈聞奏、通行照會事。得此。都省於至元二十四年二月十三日、奏過事內一件、「城子裏州縣官每、不妨管民的勾當提調者。」麼道宣敕裏寫來。如今比及倒換宣敕阿、「種的勾當提調者。」麼道著文書行阿、怎生。」奏阿、「那般者。」麼道聖旨了也。欽此。各路達魯花赤總管、添兼管勸農事。

散府州縣達魯花赤長官、添本府州縣勸農事。

④⑬

「革罷下鄉勸農」の條にいう。

江西行省准中書省咨、至元二十八年十二月十五日奏過事內一件、「江南勸課農桑、那裏的路官每、親身巡行阿、搔擾百姓有。不教行阿、怎生。」麼道奏阿、……

この史料につき、有高巖氏は勸農官がその職責を忠實に盡していなかったことの例證とされ(註③)、梅原郁氏は「元代差役法小論」(『東洋史研究』第二三卷第四號・一九六五年・所收)において、地方官の勸農業務が著しく削減されて社制の持つ勸

農の側面が後退していることの例證としておられる。なお同文の一條が『通制條格』卷一六にもみえる。

- ④ 宮崎市定氏は「晉武帝の戸調式に就て」(『東亞經濟研究』第一九卷第四號・一九三五年・所收)、『アジア史研究』第一・一九五七年・所收)において、次のようにいわれる。

「勸課農桑」は農業を奨励したり強制したりである。「不課」は寧ろ「強制しない」「免除する」という意味にさえとれる。

元代の勸農・勸課は課の一面にかたむいていった。『紫山大全集』卷二二「論司農司」には、北中國の巡行勸農司に關してではあるが「四道勸農、已爲擾民」とみえる。

- ⑤ 「秋澗先生大全文集」卷一一。

- ⑥ 『通制條格』卷一六・田令、『元典章』二三・立社類。

⑦ 和田清編『支那地方自治發達史』の第三章(松本善海氏執筆)に、『至元新格』のこの規定をひいて「社長をして里正に代り租稅徵收の任に使役することが行はれたのである」と述べられている。

- ⑧ 『養蒙先生文集』卷二「送濟南王君赴台州治中序」にいう。

至元二十四年、前杭州路治中濟南王君、被命易地台州。先是江淮省檄君覈民田於宜興(府)。

また『元典章』四七「餘糧驗時價追」の條にいう。

至元二十六年六月、尙書省准中書省咨、……差官盤點得各路至元二十四年收到糧內、短少米一萬八千二百餘石。

及び註⑨参照。

- ⑨ 宋代の租稅臺帳によったことについては、江西行省袁州路に

も例がある。『元典章』新集戸部「官員職田依鄉原例分收」の條にいう。

袁州路官員職田、至元十四年、起徵稅糧之時、亡宋俱有文簿、將屯田・營田・職田、一體科徵。

里正・主首の陪閉については、さきの王良の議案にも「其里正・主首、陪閉官糧、往往消乏」とあり、森正夫氏が「元代浙西地方の官田の貧難佃戸に關する一檢討」(『名古屋大學文學部研究論集』五六・一九七二年・所收)において引用しておられる。森氏は『崇禎松江府志』によって陪閉を陪股に校訂し、往住も在在とされるが、『正徳松江府志』によるべきであろう。

- ⑩ 至元二十八年に提刑按察使は肅政廉訪使と改稱された。また陳思濟は大徳五年に卒したから、括田はその間のことである。

- ⑪ 藤野彪「元朝の經理」(註⑩)

- ⑫ 有高巖「元代の農民生活について」(註③)、藤野彪「元朝の經理」(註⑩)。

- ⑬ 『元史』卷一五・世祖紀・至元二十五年正月癸丑(二十八日)の條にいう。

募民能耕江南曠土及公田者、免其差役三年、其輸租、免三分之一。

この記事の前後に、行大司農司・勸農營田司の記事が連續しているから、この政策も行大司農司が關係しているだろう。前に連續する記事は、行大司農司の勸農に關連してさきに引用した。

- ⑭ 「開種公田」の條にいう。

尙書省至元二十五年正月二十八日奏過事内一件、「脱脫俺

根底與文書有、『江南田地裏、公田荒閑田地多有。富戸百姓每根底與。又官司工本斟酌著與、交百姓每入來種田呵、地稅江南納的、三分裏、減了一分、交納二分呵、這般幾年謹慎提調呵、荒閑田地開了、糧也多入來有。』麼道與了文書也。俺商量的、富戸百姓每根底、田地的工本、不須與、有心種田百姓每根底、交開了、第一年、不要地稅、第二年、要一半、第三年、依着他說來的、三停內、交納二停、種的百姓每根底、不交當別個難泛差發呵、怎生。」奏呵、「那般者。」麼道聖旨了也。欽此。

⑤ 周藤吉之「南宋末の公田法」(『東洋學報』第三五卷第三・四號、第三六卷第一號・一九五三年・所收)、『中國土地制度史研究』一九五四年・所收)に、『至順鎮江志』卷六の「歲減二分」の記事と關連して述べられている。

⑥ これに對應するのが、次に掲げる『元史』卷二一・成宗紀・大德九年二月辛丑の記事である。

兗大都・上都・隆興差稅・內郡包銀俸鈔一年、江淮以南租稅、及佃種官田者、均免十分之二。

⑦ 前掲拙稿(註⑧)

⑧ 森正夫氏は「元代浙西地方の官田の貧難佃戸に關する一検討」において、「公田を含む官田は、「縣」と縣下の「財賦府」の兩者によつて管轄されている」といわれる。公田の管轄には縣と財賦府の兩系統があるとの意味であらうか。

⑨ 森正夫「元代浙西地方の官田の貧難佃戸に關する一検討」

(註⑨)

⑩ 森氏もこの文書の制度的位置づけについて述べられるが、文

意の不鮮明なところも含めて疑問がある。この文書の冒頭の「皇慶二年八月」とは、文書が中央にまわつたのち、鎮江路が江浙行省の札付を奉じた時点を指す。

⑪ 森氏はこの部分について「さらにおそらく南宋末の景定四年、民間の私有田土の強制買上げによつて公田が創設される以前に、のち公田となる田土を受託し、あるいは典賣するなどして何らかの形で私有したことがあるもの」といわれる。官田のみを耕作する佃戸の存在形態を抽出するためにこう解釋されたと思われる。しかし周藤氏も「南宋末の公田法」において指摘されたように、鎮江路では公田における抱佃輪納が認められていたから、公田の時期にも受託・典賣はありえたと考えられ、この場合に公田創設を格別に畫期とする必要はないであらう。

⑫ 宮崎市定「宋元の經濟的狀態」(『東洋文化史大系』宋元時代・一九三八年・所收)、「北宋史概説」として『アジア史研究』第一・一九五七年・所收)、日野開三郎「楊炎の兩稅法に於ける稅額の問題」(『東洋學報』第三八卷第四號・一九五六年・所收)参照。また方田均稅法關係の諸論考が參考になる。荒木敏一「宋代の方田均稅法」(『東洋史研究』第六卷第五號・一九四一年・所收)、周藤吉之「北宋に於ける方田均稅法の施行過程——特に王安石・蘇京の新法としての——」(『日本學士院紀要』一〇の二・三・一九五二年・所收)、『中國土地制度史研究』一九五四年・所收)参照。

⑬ 『元典章』四七「擄飛盜糧等例」の條にいう。

至元二十五年十月、尙書省奏奉皇帝聖旨、……據尙書省奏、百姓合納稅糧、各處官吏・坊里正・主首・權豪勢要人

等、結攬輕齋錢物、與倉官・攢典・斗脚、通同飛鈔、及管糧官吏・運糧車船人戸、侵盜官糧。

また『通制條格』卷一四「部糧」の條にいう。

至元二十七年十月、尙書省奏、……又一等強豪勢要近倉巡檢人員、不及糧稅戸、公然攬納、得訖輕齋、趁賤采買陳粟、窳米、恃勢強行送納。

④ 『通制條格』卷一七、『元典章』二四「下戸帶納者聽」の條にみられる『至元新格』賦役の一條にいう。

諸稅石、嚴禁官吏勢要人等、不得結攬。……

また『元典章』二四「徵納稅糧」の條にいう。

至元二十八年八月内、准中書省咨、科稅條畫内一款、……

一、納糧人戸、許令自行寫鈔、禁治諸人、並不得結攬寫鈔、取受分文錢物。如違治罪。

お知らせ

本年度の東洋史研究會大會を左記の要領にて會催致しますので多數御參會下さい。

記

一、日時 十一月三日（祭） 午前九時より

一、會場 京都市左京區吉田近衛町

京都大學樂友會館大ホール（二階）

尙 本年度は役員改選年度に當つて居ります。投票時間は午前九時十分より午後一時十分までですので、有權者（會員）の方々は、必ず御投票下さるよう御願ひ致します。

東洋史研究會

The Taxation System in Southern China 江南 in the Early Yuan 元 Period

By Tadashi Uematsu

This article deals with the authoritarian taxation policy with respect to Southern China carried out mainly during the period of the Uighur minister Sengge's regency (1287-91). Sengge was attempting to collect taxes in money and grain which had never been collected since the occupation of the south. For this purpose, for each province (*xing-sheng* 行省) an investigative accounting called *li-suan* 理算 was instituted, and a *zheng-li si* 徵理司 created to supervise it. Owing to the harsh accounting investigation performed by tax contractors serving as auditing officials (*li-suan guan* 理算官), considerable unrest broke out and the political situation was unstable.

The newly established Travelling Court of Agriculture (行大司農司) and the Agriculture-Encouraging State Colony Authority (勸農營田司) and other offices for the encouragement of agriculture supervised the Yuan's first cadastral survey (called *kua-kan* 括勘) and played important parts in tax policy. At the time of this survey the government was favorably disposed towards the amassing of holdings by big landlords, and, aiming at guaranteeing the quota of tax grain, determined the amounts of tax to be collected by the *lu* 路 and *xing* 府, which were the lowest-level agencies involved. These agencies were supposed to collect more taxes than were actually due, in order to produce a surplus. The significance of this *kua-kan* method is that it established a system whereby responsibility for taxation was shifted from provincial units to local authorities, and thence to rural functionaries such as *li-zheng* 里正, *zhu-shou* 主席, and *she-zhang* 社長.

State land, which was the fundamental component of the grain tax system, especially the Public Fields (*gong-tian* 官田) created by Jia Si-dao 賈似道 in late Southern Song, continued through Yuan via the operations of *Kua-kan*, and in consequence the peasants of Jiangnan were not liberated from their onerous taxes.

**The Controversy over the Principle of People's
Livelihood 民生主義 between *Min-bao* 民報 and
Xin-min tsong-bao 新民叢報**

by Tetsuo Horikawa

The merging of revolutionary groups and the upsurge in calls for revolution which resulted from the establishment of the Zhongguo tongmeng hui 中國同盟會 were a grave threat to Kang Youwei 康有爲, Liang Qiqiao 梁啟超, and other reformists who preferred gradual reform under the aegis of the Qing 清 dynasty. Consequently there was a fierce controversy between *Min-bao* 民報, the Tongmenghui organ, and *Xin-min tsong bao*, which represented the reformers' standpoint, about the propriety of their political lines.

This article singles out from the many bases of controversy Sun Wen's 孫文 Principle of People's Livelihood (*minsheng zhuyi* 民生主義) and the necessity of a "social revolution" which accompanied it, in order to examine the political attitudes and roles of the revolutionaries and the reformers in this period and the position of the Principle of People's Livelihood within the revolutionary group.

The first part of the article reviews the general course of the controversy, and the latter part sorts out and deals with the specific problems.